

夢と老婦人（窓・論説委員室から）

見知らぬ方から、今年の初め手紙をいただいた。「持っていた土地が値上がりしたのは、意図せざることに。社会にお返ししたいのです」

八十八歳を区切りに土地を処分した。手元には生活費だけあればいい。残りを「寝たきり」をなくす仕事に使っていただきたいのだが、という。とっさに頭に浮かんだのが千葉忠夫さんだった。

二十六年前、二十六歳の春、リュック一つでデンマークへ渡った。養豚農家に住み込み、働きながら言葉を身につけ、大学で福祉を学び、現場で経験を重ねた。五十歳に近づいた時、千葉さんは、デンマークと日本の福祉の懸け橋になる仕事を始める時が来た、と心に決めた。

廃校になった小学校を買い取り、少しずつ改造した。そこは「寝たきり老人」のいない国、デンマークを学びにくる日本人の勉強の拠点の一つになった。

千葉さんの夢はさらにふくらんだ。デンマーク政府の認可を受けよう。そうすれば、運営費の八五%が公的に保障される。日本から勉強にくる人たちの負担を減らせる。デンマーク人も日本語や日本文化を学びたがっている。ここを日本とデンマークの文化交流学院にしよう。

文化省も応援してくれることになった。だが、開校するには生徒と先生が寝食をともにする寮の建設費など、少なく見積もっても五千万円かかる。日本の代表的な企業白社に寄付依頼の手紙を書いたが、応答なし。千葉さんは、落胆した。

私は手紙の人に電話して千葉さんの夢を伝えてみた。その人は、デンマークに一千万円を送った。匿名だけが条件だった。学院は、開校に向かって、一歩動き始めた。

「お礼などとてもない」と固辞する、その人を無理に訪ねた千葉さんから、感動しきった声で電話があった。

「尋ねあてた家は、実に質素でした。そこから上品な老婦人が出てこられました。それが、あの方でした」

千葉さんの夢に物心で参加しようと思う方は、〇三―三二八八―〇〇六八へ。

〈雪〉